

京都幼稚園編纂の「ヌリエ」に関する考察

浜 崎 由 紀

(発達教育学研究科児童学専攻研修者)

深 澤 素 子

(京都幼稚園主事)

矢 野 真

(児童学科教授)

はじめに

1941(昭和16)年に日本保育館(フレーベル館)から刊行された、京都幼稚園編纂の「ヌリエ」が発見された。日本では、ぬりえは児童文化財として明治期より流布していたが、消耗品として扱われることが多く、現存するものは少ない。しかも戦時期にはそもそも出版そのものが困難であり、その点からこの「ヌリエ」の存在は貴重なものであると言える。

戦前のぬりえについて先行研究で取り上げられているのは、幼児教育におけるぬりえが対象である。それらは、幼稚園でのぬりえの実践について断片的に述べられているにすぎず、清原みさ子『手技の歴史—フレーベルの「恩物」と「作業」の受容とその後の理論的、実践的展開』(新読書社 2014)をはじめとして論考にいたるものは少ない。また研究史としては、幼稚園ぬりえとその指導の実践について、当時の保育観の視点から史的に論及された米村佳樹の「昭和戦前期の幼稚園におけるぬりえとその指導」(幼児教育史学会「幼児教育史研究」第9号 2014)があり、そこでは幼児教育史におけるぬりえの位置づけに触れられている。

このように、ぬりえ作品そのものを分析した研究はみられないため、本稿では、京都幼稚園編纂の「ヌリエ」(以下「ヌリエ」)を取り上げ、「ヌリエ」が刊行された背景、戦時下における「ヌリエ」の特徴、それをういた京都幼稚園のぬりえ観について明らかにしたい。

1. 幼児教育におけるぬりえ

幼児教育におけるぬりえの実践は、大正期よ

り、「彩色」や「ぬり絵」として保育項目「手技」にみられる¹⁾。当時ぬりえの研究は、東京師範学校保姆兼教諭の及川ふみや日本幼稚園協会の主事であり幼児教育者として中心的存在であった倉橋惣三が中心となり、日本幼稚園協会で進められていた。そして、その研究をもとに、日本幼稚園協会が編纂し、フレーベル館から発行したぬりえを使用していたのである²⁾。またこれらのぬりえの研究や実践の報告は、『幼児の教育』(フレーベル館)誌上でも公表された。

こうした日本幼稚園協会の動きに触発されたため、大阪戸部保育品製作所(「ヌリエ帖」1929年)や大阪幼児教育研究会(「アタラシイ・ヌリエ」1930年、1939年)、若越保育会(「ヌリエ帖」1936年、1939年)などがぬりえを発行している。また実際に幼稚園でぬりえが使用されていた報告もあり³⁾、戦前期、ぬりえの実践が幼児教育の場で広がっていたことが推測できる。

他方、フレーベル館は、日本幼稚園協会編纂のぬりえを刊行するだけでなく、前述したとおり、京都幼稚園が編纂した「ヌリエ」を1941(昭和16)年12月に「日本保育館」の名称で発行している。

フレーベル館は、1941(昭和16)年11月1日「株式会社フレーベル館」を「株式会社日本保育館」と改称し、同日代表取締役が高市慶雄が就任し、1942(昭和17)年4月『観察絵本キンダーブック』を『観察絵本ミクニノコドモ』と改題した。つまり、『観察絵本キンダーブック』の直接販売形式が解体し、会社としての大きな変換期にこの「ヌリエ」を出版しているのであ

る⁴⁾。

当時、ぬりえに関しては、創造性が阻害されるという主旨の批判があった時代でもある。さらに、戦時下で「出版用紙配給割り当て規定」が施行され、用紙が配給されていた時期でもあったため、フレーベル館としては、かなり厳しい状況下での刊行であったことがわかる。そのような中で発行された京都幼稚園編纂の「ヌリエ」について順次みていくことにする。

2. 京都幼稚園編纂の「ヌリエ」

(1) 京都幼稚園

京都幼稚園は、1917（大正6）年5月、京都市東山区に開園した本願寺認可の私立の幼稚園である。

大正期は、急速な産業の発展と自由主義的な教育文化の普及の中で、幼児教育に対する関心や要求が高まり、幼稚園が急増した時代である。そのようななか、本願寺は、仏教日曜学校の中心的役割を担い、積極的に教材の研究や講演会を開催するなど、幼児・児童への宗教教育への取り組みを本格し、幼稚園を開園していた。

京都幼稚園初代園長の岩井栄之助は、京都幼稚園設立以前は、永年小学校教育に携わり校長職を務めていた。彼は、小学校教育に携わるなかで、幼児保育が人格形成に果たす重要性を痛感していた。そこで岩井は、京都高等女学校校長の朝倉暁瑞に幼稚園設立を相談し、計画書を立案した。それは、学園や本願寺の支援を受けながら、岩井栄之助が自ら園長としてその任務・運営にあたるというものであった。

その後、朝倉が本願寺に「幼稚園附設ノ義認可申請」を提出し、私立京都高等女学校設立者であり龍谷山本願寺の大谷光瑞門主が設置者となり、京都幼稚園は開園した。当初の「私立京都幼稚園規則」によれば、入園資格は「満三年以上学齢迄」で定員は「百名」。保育料は「一人一ヶ月一円二十銭」であった⁵⁾。

こうして、幼稚園認可の申請書を提出してわずか3カ月あまりで開園した京都幼稚園は、初年度87名の園児を迎えた⁶⁾。

京都幼稚園の実践の一端は、幼児保育雑誌

「保育」（全日本保育聯盟1937. 5 2号 p. 31）にも以下のようにみられる。

「幼児の心身鍛練」

岩井博善

當園では去る二月より園児に寫眞の如き劍道をやらしてゐます 元來、幼稚園は女の先生ばかりでありますので、男の子が兎角餘りにも優しくなり勝ちであります。「男らしさ」を益々培養してやりたい、しかもその内に規則正しい、禮儀正しい、規律を保持して、身心とも立派なものにしてやりたいと念願してゐます。幸ひこれを開始しましてからまだ日は浅いのでありますが、相當の効を収め、しかも教授者岡村先生の人格に依つて、當園の目的とする處へ近付きつゝあります。本年卒業園児の希望者の請求により、特に卒業園児にも、週一回の訓練をしてゐるのであります。初めての試みでもあり當園としても、多大の希望を持ってその成果をみつめてゐる次第であります。

戦時下、男児は、心身鍛練を取り入れ、強い皇国民を育てることが求められる時代にあつて、京都幼稚園もこの点に力をいれていたことがわかる。

1939（昭和14）年9月発行、29号「保育」（p. 83）にも次のような記事が掲載されている。

京都幼稚園児 NIPPON の人文字

世界一周飛行機「ニッポン」を讀へて今熊野の京都幼稚園では七月十五日朝園児の可愛い坊ちゃん嬢ちゃん達百五十名で園庭に見事な“NIPPON”の人文字を作った、折から排英運動が全国的に澎湃としてゐる時だけに指揮に當った同園の岩井博美主事「いや これは英語ぢやありませんよ、ローマ字ですよ、これでないと歴翔する三十何ヶ國人にはわからぬのでね」となかなか用意周到ぶりを見せてゐた、榮光あれ！われらの一周機ニッポン！

京都幼稚園は、1935（昭和10）年からドイツ製の自動車（ベンツ）を通園バスにするなど、当時としては珍しく、最先端を行く取り組みが目立っていたようである⁷⁾。

その後、1941（昭和16）年には主事であった岩井博美（龍二）が二代目園長に就任した。

同年12月には太平洋戦争が勃発し、軍事需要が最優先となり生活物資の欠乏も深まり、幼稚園でも紙やクレヨンなどの教材も入手困難になっていった。教職員は自宅から紙を持ってきたり、新聞雑誌で教材を手作りするなど、物資調達にも厳しい時代に直面していた⁸⁾。

京都幼稚園は、1924（大正13）年12月5日に貞明皇后ご来校の日を祝して行啓記念日と定めており、「ヌリエ」の発行年月日は、1941（昭和16）年のまさに12月5日である。これは、代表であり「ヌリエ」の校閲編集指導にあたった岩井博美（龍二）がこの年1月に一代目岩井栄之助に代わり、園長に就任したことに關っているのではないかと推察される。

(2) 京都幼稚園編纂の「ヌリエ」の内容

「ヌリエ」は、冊子体にはなっておらず、B5版の紙ケースに入り、16枚のぬりえで構成されている。またこれには、「第一号（年少組）」と記されていることから、年中・年長組の第二号・第三号まで編集視野にあったと推測できる。現在のところこの第一号（未使用）が確認されており、二号、三号の発見には至っていない。



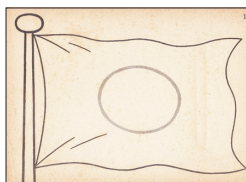
(写真1)

全16枚のぬりえは、それぞれ1枚ずつぬりえの右上に番号が付してあり、「ヌリエ」のケースに各月の題材の名前が記されている⁹⁾。

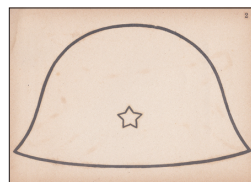
それぞれのぬりえは、4月国旗（写真2）、5月鐵兜（写真3）、6月犬（摺紙應用）（写真

4）、7月虹（写真5）、8月団扇（写真6）、9月汽車（貼紙應用）（写真7）、10月電燈（写真8）、11月菊（写真9）、12月雪（写真10）、1月お社（写真11）、2月紀元節（写真12）、3月雛（写真13）、水兵さん（写真14）、角力（写真15）、貯金箱（写真16）、戦車（写真17）となっている。季節を感じさせる「虹」や「団扇」、「菊」や「雪」、「雛」の他、戦争と関わる「鐵兜」や「水兵さん」、「戦車」などの図柄が見られ、戦時下の実態を反映したものとなっている。また、仏教系の幼稚園でありながら、神話や皇国史観につながる「お社」や「紀元節」などの図柄がみられ、ここでも日々の生活の中で皇国民を育てようとした時代の反映を見ることができる。その他の図柄は「イヌ」や「虹」、「角力」、など子どもの馴染みのあるものである。

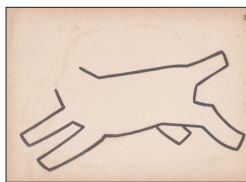
輪郭線は1mmから、太いところでは3mmあり、年少組の子どもが「ヌリエ」を彩色した



(写真2)



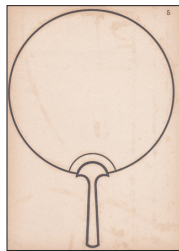
(写真3)



(写真4)



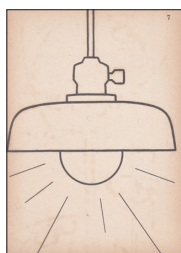
(写真5)



(写真6)



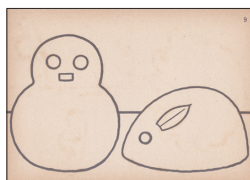
(写真7)



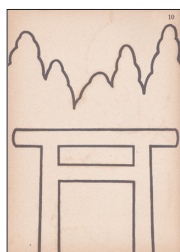
(写真 8)



(写真 9)



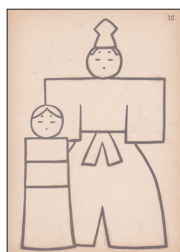
(写真10)



(写真11)



(写真12)



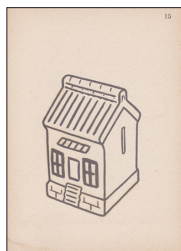
(写真13)



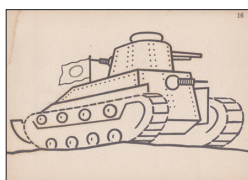
(写真14)



(写真15)



(写真16)



(写真17)

際、はみ出しても分かりにくいようにという配慮が見られる。

作書・考案は、竹川青流と記されている。竹川は、1907年京都府生まれ（1983年没）。京都市立美術工芸学校（現：京都市立銅駝美術工芸高等学校）、京都絵画専門学校（現：京都市立芸術大学）卒業、旧高等女学院図書教員で各幼稚園の美育指導に従事し、幼稚園教諭も歴任した。日本画家であり摺紙（折紙）作家である。本名は竹川青良。青流は号である。また彼の名は、『同朋運動史資料三』（浄土真宗本願寺派同朋運動変遷史編纂委員会編集 浄土真宗宗本願寺派宗務事業局 本願寺出版社 1989）の中に見ることが出来、1936（昭和11）年8月22日から28日まで真宗本願寺派社会部主催「第4回幼児保育講習会」が京都女子高等専門学校で開催され、摺紙（折紙）の講師を担当している。「保母の心得」は京都女子高等専門学校校長の朝倉晁瑞、「幼児童話法」には久留島武彦の名も挙がっている。

保育教育雑誌「保育」によると、この当時、全国でも保育講習会が行なわれていたことがわかるが、関西でもそれぞれの団体が、保育講習会を行っていた。竹川が「ヌリエ」を作画した背景には、前述の講習会開催校である京都女子高等専門学校で講師として担当したことや、竹川が在籍した京都市立美術工芸学校の所在地が、京都幼稚園のある東山区今熊野にあったこととも関係しているのではないと思われる。

「ヌリエ」の4月の「国旗」を見ると、旗の輪郭線が直線のみでなく、曲線を取り入れながら布のしわや風になびいている様子が描かれ、毛筆画（日本画）の特徴が見られる。11月の「菊」、12月の「角力」等の図柄も流線型で描かれ、リアリティが感じられる作品になっている。

6月の「犬」は、胴体のみの輪郭線が描かれ、「摺紙應用」とあることから、子どもが摺紙で作った犬の顔を貼付していたと思われる。9月の「汽車」も「貼紙應用」とあり、ぬりえと貼り絵の両方ができるように工夫されている。「汽車」の図柄は及川ふみ著の『幼稚園の手技製作』（フレーベル館 1932）に類似したもの

がみられ、この図柄を参考にしながらぬりえ以外の貼紙も取り入れ、保育項目の手技を行っていたのではないと思われる。

次に、「ヌリエ」が入れられているケースをみると、ケース表紙中央には、ぬりえをしている子どもの横顔が描かれ、その周りは判で押したような兎と狸の型が規則的に並んでいる。なお、ケースの裏表紙は兎と狸の型を背景に「ヌリエ」の意義と題して、京大文学部心理学教室講師園原太郎の巻頭のことが以下のように掲載されている。

大抵の子供は「ヌリエ」が大好きだ。何故あんなものが面白いのだらうと時々考へさせられる程、「ヌリエ」に夢中になってゐる。美しく仕上げるといふことは、子供に執つては創作に等しい喜びである。我々は創作に於ける子ども^(ママ)の澁澁たる動機を尊ぶと共に、又仕上げる喜びが持つ意義を教育的に肯定することも大切だ。(中略) 子供は型を與へられても型に捉はれない。又捉はれさせてはならない、輪郭は與へられても、そこを充實するものは子供の眼で見た實相であり、子供の手による表現である、子供は、無上の協力と励ましとをそこに感ずればこそあんなに喜び勇んでその仕上げに取りかゝるのである。

園原は、子どもにとってぬりえは魅力的であり、喜んで夢中になっていると子どもの特性を捉え、さらに「子供の楽しみに任せて置けば種々様々な遊び方をするであらう。」と続けている。つまり、子どもの楽しみの根源を「遊び」と解している。そして教育の観点からこれを取り上げる場合は、「その楽しみの中に織り交ぜて、子供がより深く、より多様に現実の姿を体得して行くやうに誘導したいものだと思ふ。」¹⁰⁾と述べ、ぬりえは創造性を搞むのではなく、夢中に楽しむ「遊び」と指導的配慮を区別しながら指導者は子どもと関わる必要があるとその意義を説いている。

3. 京都市保育会研究部編輯のぬりえ

京都市保育会研究部編輯のぬりえ（以下「京都市ぬりえ」と記す）(写真18)は、「彩色帖」というタイトルで、甲〔年長〕向けに、1925（大正14）年4月30日に初版発行され、1926（大正15）年4月15日再版発行、1930（昭和5）年3月25日に第7版が発行されている。発行兼編輯者は、京都市上京区城巽尋常高等小学校内、代表者山岡為である。

「京都市ぬりえ」は、京都幼稚園と同様、冊子体にはなっておらず、サイズはB5版の横長で一枚ずつカード式になっている。ケースの内側に目次があり、内容は次のとおりである。

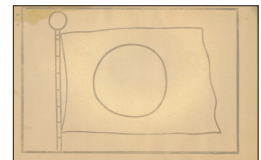
四月「国旗」(写真19)「櫻」、五月「鯉幟」(写真20)「蒲公英」、六月「金魚」「田植」、七月「鉾」「山登り」、八月「七夕」「海水浴」、九月「葡萄」「月見」、十月「運動會」「柿ト栗」、十一月「菊」「取り入」、十二月「歳ノ市」「サンタクロース」、一月「毬」「凧」、二月「金鶏」「梅」、三月「雛」「軍旗」である。

ぬりえを確認してみると、その図柄が1枚だけのものもあれば、2枚ずつ入っているものもある。2枚ずつ入っているものは全く同じ図柄であるものもあれば、1枚に「もっと簡単に」「簡単にする」と自筆でメモ書きされており、もう一枚がそのメモをもとに簡単にしたであろうと思われるぬりえが入っている。

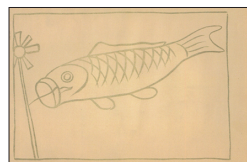
これらのことから、試行錯誤しながらぬりえが制作されたのではないかと推測される。さら



(写真18)



(写真19)



(写真20)

に、目次には書かれていない図柄のぬりえが入っていたり、入っているはずの図柄のぬりえが入っていない等、乙[年中]向け、丙[年少]向けのぬりえが存在し、それが甲[年長]向けに混入されたのではないかと推測できる。

作書・考案の名前はないが、輪郭線の線幅は、1mmから3mmあり、毛筆画のような流線型である。この点、「ヌリエ」と同様の筆遣いである。

京都の小学校は、明治維新以降、学制に先駆けて地域住民（「番組」と呼ばれる複数の町内で構成された町組の住民たち）が資金を出し合い運営し、「番組小学校」を創ってきた歴史がある。幼稚園も同様に、各小学校の校内に併設し、校長が園長を兼任している園もあった。

京都の教育は、西陣織や清水焼など京都の伝統産業を再興する上で力を入れてきた経緯がある。政府から国定教科書の使用通牒があるまで、図画教育は、「日本画の手法」の修得に力を入れていたのであり、毛筆画を主流とし日本画家の上村松園をはじめとする優れた画家を輩出している。このようなことから、おのずと小学校の図画教育が幼稚園教育にも反映され、ぬりえ教材として使用していたのではないと思われる。それゆえに、「ヌリエ」に先立ち発行された「京都市ぬりえ」は、「ヌリエ」にもその影響を与えたのではないかと考えられるのである。

4. 当時のぬりえ観

この当時、ぬりえに対しての様々な批判があったが、湯川尚文は『児童と繪畫』¹¹⁾の中で次のように述べている。

「ぬり繪は大變兒童が好んでやつてゐるやうであるが、これは兒童の好むもの必ずしも兒童の教育上、望ましいものではないといふ一つの例に當嵌るものである。」「兒童の創作心を全然容れる餘地がない」「思ひつきの色を無意味にぬる習慣や、輪郭線にのみたよつてものを描くやうになるといふ悪習慣が自然に養はれ」るなどである。

そこで前述のフレーベル館発行の「幼児用ヌリエ」に関して、1929（昭和4）年10月の『幼

児の教育』（フレーベル館 第29巻）に掲載の「保育座談会」では「ぬりゑ」「切紙」と題して「本会編纂の『ぬりゑ帖』」を持ち寄って話し合っており、ここからは当時のぬりえへの批判に対して、ぬりえを刊行する側の考えがわかる。すなわち、一般的な考え方として「『ぬりゑ』をぬっていると子どもが手本なしで描くときの妨害になると考えられているが、そうではなく、『ぬりゑ』本来の目的は、「金魚」の描き方を教へるためではない」としているように描画と「ぬりえ」との違いが明確である。さらに、「なるべく幼児をして自由に色彩を選定させ表現を拘束しない方がよいのである」とし、子どもの楽しみに任せることを良しとしているのである。

また「童画」という言葉を提唱した武井武雄は、自らが編纂した「ヌリエ」¹²⁾の中で「ヌリエの要求は近年特に著しいものがあります」と述べ、識者たちの批判はあったとしても、数多く使われている状況を記している。そして「理論的にのみ完璧を期す傾向があつて、材料の表現感覚が異状に冷」いと述べ、「味がよくてこそ栄養は倍加される様に、喜び楽しんでこそ畫の境地はすすみます。これ等の點にいささかこころづかひしてこの輯を編みました。」としている。

おわりに

戦争へと突き進む社会状況のなかで、京都幼稚園編纂の「ヌリエ」は刊行された。当時のぬりえ論争のなかにあつて、京都幼稚園が、保育・教育教材として「ヌリエ」を編纂した背景には、子どもがぬりえで遊び楽しむものであることを十分理解したうえで、指導者が教育的課題を誘導すればよいと考えていたことがある。そして、ぬりえに対しては、子どもが遊び楽しむものであることを重要視していたこともわかる。そのことは、心理学者の論理的根拠があつたからではないと思われるが、またその内容が、日本画の手法の修得という京都独自の教育風土にも合致したものであつたためでもあろう。

戦時下の厳しい時期に、さまざまな時代の影響を受けるだけではなく、真に子どもの成長を

支える保育・教育教材の一つとして刊行されたことの意義は大きいと考えられるのである。

注

- 1) 清原みさ子「保育の記録にみられる手技—大正時代から昭和10年にかけて—」『愛知県立大学教育福祉学部論集 58』p. 11 2009
- 2) 日本幼稚園協会編纂，フレーベル館発行のぬりえに関する論考は，浜崎由紀「戦前のぬりえに関する一考察—日本幼稚園協会編纂フレーベル館発行の作品を中心に—」（京都華頂大学・華頂短期大学研究紀要第59号2014）を参照されたい。
- 3) 清原みさ子『手技の歴史—フレーベルの「恩物」と「作業」の受容とその後の理論的，実践的展開』新読書社 2014で報告されているほか，筆者が日本保育学会第68回大会（浜崎由紀，林宏美，棚橋美代子「戦前の富士見幼稚園における保育内容(2)—ぬりえを中心に—」2015. 5. 9）で報告した東京都の富士見幼稚園（1924—1944）でもぬりえの実践がみられる。
- 4) 『フレーベル館100年史』フレーベル館 2008. 2. 1
- 5) 1924年から1944年に開園していた前述の東京

の富士見幼稚園では，入園料が1円，保育料は月3円であった。

- 6) 学校法人 京都女子学園『京都女子学園百年史 心の学園111年のあゆみ』pp. 722—725 2010. 12. 5
- 7) 前掲6) pp. 728—729
- 8) 前掲6) pp. 729—730
- 9) 4月～3月までは「月」が明記されているが，残りの4枚には，「月」の記載はない。
- 10) 「ヌリエ」№1 京都幼稚園編纂 日本保育館 ケースの裏面に記載
- 11) 総合美術研究所出版部 p. 253 1942
- 12) 武井武雄作「ヌリエ」№6 日本保育館1940（昭和15）年発行，武井武雄作「ヌリエ」（上）（下）日本保育館1942（昭和17）年発行の前文

付記

本稿は，2013年に開催された真宗保育学会第20回大会で発表した「京都幼稚園編纂の『ヌリエ』に関する考察」（浜崎由紀，深澤素子，棚橋美代子）の内容を加筆修正しまとめたものである。